

## [書 評]

## 「モヤモヤ」から始まる歴史実践の記録

——加藤圭木〔監修〕一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール〔編〕『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』（大月書店、2021年）、加藤圭木〔監修〕朝倉希実加・李相眞・牛木未来・沖田まい・熊野功英〔編〕『ひろがる「日韓」のモヤモヤとわたしたち』（大月書店、2023年）を読む——

小 阪 裕 城 ・ 酒 井 晃

## 1. はじめに

本稿は、『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』（大月書店、2021年）（以下、『モヤモヤⅠ』と略記）および、『ひろがる「日韓」のモヤモヤとわたしたち』（大月書店、2023年）（以下、『モヤモヤⅡ』と略記）を評するものである。評者二人のプロフィールを簡単に述べておくと、一人（小阪）は、国際関係論およびアメリカ現代史の領域で、国際人権の歴史を研究しており、もう一人（酒井）は、日本近現代史およびジェンダー史を専門とし、特に男性史やクィア史の領域で研究している。

2021年に刊行された『モヤモヤⅠ』は、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナールに所属する五人の学部学生が、日本と韓国をめぐって日常のなかで感じた「モヤモヤ」を起点として、日々の学生生活のなかで学び、考えたことの記録である。同時に、K-POPや韓流ファンとして日韓関係をどう見ればいいのか、読者を思索へと誘う「日韓」関係史入門ともなっている。

その二年後に刊行された『モヤモヤⅡ』は、前著の続編として執筆されたものである。『モヤモヤⅠ』は1万2000部の売り上げを記録し、SNS上でも話題にのぼった。『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』の反響や、それを受けて起こった出来事、日韓関係の変化とその意味、日本や韓国での植民地支配の記憶のズレがなぜ生じるのか、戦争責任・植民地支配責任をめぐる社会運動の意義について、詳しく掘り下げようとしている。とりわけ『モヤモヤⅡ』は人権問題をないがしろにする日本社会を批判的に検討し、「モヤモヤ」を生み出す社会構造にメスを入れる、いわば実践の書となっている<sup>(1)</sup>。

なお、両書と同時期には、同じ一橋大学社会学部に属する二つのゼミが、やはり学部学生の手による入門書を刊行している<sup>(2)</sup>。いずれも話題を呼び、あたかもシリーズであるかのように言及されたりもしているが、この二点はQ & A形式に徹しており、二つの『モヤモヤ』とは内容・構成の点で大きく相違している。以下で論じるように、『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』は、執筆する・語る主体としての学生たちの思想や個性が全面的に展開しており、いっそうチャレンジングにして魅力的な試みとなっている。

## 2. 『モヤモヤ I』をめぐって

### 2-1. 『モヤモヤ I』の概要

まずは『モヤモヤ I』の構成を簡単に紹介する。本書は四つの章から成っている。

第一章「わたしをとりまくモヤモヤ」は、「日本って全然寛容で優しい親切な国じゃない?!」のではないかと、「推しが「反日」かもしれない……」、「韓国が好き」と言っただけなのに」といったかたちで、高校や大学での日常で直面するモヤモヤが語られている。

第二章「どうして日韓はもめているの?」では、「韓国の芸能人はなんで「慰安婦」グッズをつけているの?」「なんで韓国は「軍艦島」の世界遺産登録に反対したの?」「どうして韓国の芸能人は8月15日に「反日」投稿するの?」といった日々のニュースから湧いてくる素朴な疑問から、「慰安婦」問題、徴用工問題、植民地支配の歴史をコンパクトに解説している。

第三章「日韓関係から問い直すわたしたちの社会」は、「なぜ韓国人は「令和投稿」に反応するの?」「韓国のアイドルはなぜ兵役に行かなければならないの?」「日本人だと思っていたのに韓国人だったの?」といった問いから、南北分断の歴史や在日朝鮮人史を概観しつつ、わたしたちの問題として捉えることを促している。

第四章「「事実」はわかったけれど……」、その先のモヤモヤ」は、これまでの章の展開を受けたいえでの、本書の白眉というべきパートである。「K-POP 好きを批判されたけど、どう考えたらいいの?」「ただの K-POP ファンが歴史を学びはじめたわけ」「韓国人留学生が聞いた日本生まれの祖父の話」「韓国人の友達ができたけれど……」と各執筆者の経験が「モヤモヤ」を経由して、思想へと昇華させていったプロセスが示されている。

各章にはコラムと執筆者による座談会が配され、補遺と次章への橋渡しとして機能している。巻末の主要参考文献一覧を見ても明らかなように、いずれの章も確かな研究の蓄積のうえに執筆されており、コンパクトでありながら、学術的に水準の高い入門書となっている。

### 2-2. 『モヤモヤ I』の意義

『モヤモヤ I』は、若者による現代史入門であると同時に、若者による歴史実践の記録でもある。その魅力は、日常で直面する「モヤモヤ」を起点として、目の前の現象の背後にある構造を掘り下げていくところにある。以下ではその特徴を二点に整理してみよう。

第一に、文化から政治を見る、ということである。K-POPをはじめ、軍艦島の世界遺産登録や、ソーシャルベンチャー企業のマリーモンド、チョ・ナムジュの小説『82年生まれ、キム・ジヨン』など、文化を切り口とすることで、幅広い読者の関心を惹きつける。だが本書は韓国文化についてのトリビアではない。本書で紹介される文化は、あくまでも政治を考えるための入り口である。

第二に、歴史のなかで見る、ということである。刻々と変化する現代社会にあって、わたしたちは日々、膨大な量の情報の渦に取り巻かれている。そのようななかで、わたしたちが物事を見つ

める視点は極めて刹那的だ。ニュースの話題は短期間で移り変わっていく。それを見るわたしたちが持ちうるのは、表面的な印象を超えるものにはならない。なかなか思考にまで至らない。それに対して『モヤモヤⅠ』は、物事と向き合う際に、時間軸の長さを伸ばしてみるものの大切さを教えてくれる。

たとえば、韓国のアイドルが兵役に就くことがしばしば話題になる。彼らはなぜ兵役が課せられているのか。日本に生きるわたしたちにはイメージの湧かない問題について、本書は歴史を紐解く。朝鮮半島ではじめての兵役(徴兵制)は1944年に日本によって導入されたこと、今も徴兵制が残っているのは南北分断の歴史の故だということが確認されている。『モヤモヤⅠ』を通じて、読者は日々の芸能ニュースで感じる素朴な疑問から、朝鮮半島の現代史へと、物事の掘って立つ構造を見る視野を獲得する。だが本書の凄みはその先にある。兵役の歴史から韓国現代史へと話を広げつつ、『モヤモヤⅠ』は、それは「日本には関係ないのか」と問いかける。日本人は兵役を、日本と切り離された「悲劇」と捉えてはいないか。朝鮮半島の分断と南北の対立の歴史に、日本は当事者として関わっているのだと指摘する(『モヤモヤⅠ』、94-95頁。以下、「モヤモヤ」は省略し、Ⅰ・Ⅱと頁数のみ記載する)。

韓国の芸能人による「反日」投稿もしかりである。「推し」が「反日」とされていることをどう考えればいいのか。本書は、やはり歴史を掘り下げることで、「反日」というコトバの意味を問う。植民地支配の歴史を簡潔に概観することで、「独立」や「解放」の意味を確認する。また、「反日」とされる投稿をきちんと読むと、彼ら彼女らが決して日本を否定しているのではないことが指摘されている。人権が侵害され、それが回復されないまま放置されている現状を正面から受け止めることを訴えているのである(Ⅰ、61頁)。『モヤモヤⅠ』は、表面的に「反日」と決めつけず、まずは考えるものの大切さを強調している。巷間流布する言葉やイメージが、いかに物事を把握し損ねているか。歴史を学ぶことは、物事を構造的に捉えることを可能にする。歴史は役に立つのである。

印象的なのは、文化と政治は切り離せないという強いメッセージだろう。はたして文化交流で対立は解消するのだろうか。両国関係の緊張を前に、単に「好きです韓国」というハッシュタグを掲げることは、きちんと相手と向き合っていることを意味するのだろうか。本書の立場は明確だ。それは、何よりもまず人権を視座の中心に据えなければならないということである。そして、本書はテッサ・モーリス＝スズキの議論を援用し、「連累」という概念を紹介している。現代のわたしたちに過去の収奪や虐殺の直接的な責任があるわけではない。けれども、そのような過去のうえに、現代の物質世界と生活を築いている以上、わたしたちには過去の不正義を直視し、その是正に取り組む責任がある。それが「連累」である。「韓国が好き」だけで済ませていいのだろうか。韓国の兵役は日本と関係ないのだろうか。こうした問いを次々に積み上げていく本書のバックボーンには、著者らの思想においてこの「連累」概念が咀嚼され、しっかりと根付いていることが明らかである。それは、民主化を扱った名作映画を紹介するコラムにも生きている。そこで描かれる民主化運動の闘いは感動的だが、それを消費するだけで終わってはならない。軍事独裁政権

が「親日派」の人脈に立脚すること、日本の植民地支配の歴史にルーツを持つことを忘れてはいけない、他人ごとにしないことが重要だと明確に示している（Ⅰ、99頁）。

本書は、「永遠の0」をめぐる経験や、韓国の民主化を扱った映画を紹介している。本書がすばらしいのは、そうした作品をフラットに見るとたしかに感動してしまうけれども、その感動ストーリーから何が不可視になっているかを考えなければならないという指摘がきちんとなされていることである。評者は、国際関係論やアメリカ史に関連する授業の場でときに映画を教材として用いることがある。ホロコースト映画や、奴隷制や警察暴力を描いた作品（たとえば「それでも夜は明ける」、「デトロイト」、「フルートヴェール駅で」）である。こうした作品を視聴したとき、多くの学生たちは、差別と暴力の歴史に衝撃を受ける。そこから各人の思考が始まる。しかし、日本には差別はないという認識があるのだろうか、一部の学生からは、「どうしてあっちの人たち（欧米の人たち）はこんなひどいことをできるのか、日本人はこんなことしない（できない）。」といった感想が寄せられることがある。西洋史やアメリカ史を学ぶことが「日本（人）例外論」につながることも限らないということを痛感する瞬間である。本書は、そのような評者の「モヤモヤ」を吹き飛ばす手がかりを与えてくれる。

### 3. 『モヤモヤⅡ』をめぐって

#### 3-1. 『モヤモヤⅡ』の概要

次に『モヤモヤⅡ』の構成を見ていこう。『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』と同様、四つの章から成っている。

第一章「ひろがる「日韓」のモヤモヤ」では、『モヤモヤⅠ』を刊行してからの反響と『モヤモヤⅡ』のコンセプトが記されている。キーワードは「想像力と当事者性」である。韓国の文化を楽しく消費すること（文化の消費）が植民地支配や朝鮮への差別を不可視化しているのではないかという問題意識のもと、座談会ではゲストに大阪府立中学校教諭の平井美津子を招き、葛藤や「モヤモヤ」の共有を図り、そうしたことを許してしまっている日本社会を鋭く批判する。平井と編者たちが対話を通じて、「想像力と当事者性」の重要性を提起し、「社会は変わる」（Ⅱ、41頁）という具体的思考や実践を次章以降で展開しようとする。

第二章「「日韓」のモヤモヤとわたしたちの社会」では、「想像力と当事者性」を減退させる動きとして、加害の歴史を否定する歴史否定論がなぜ生まれるのかについて、戦後史の射程から考察する。その要因を冷戦体制のなかで形成された日米韓の同盟体制（「65年体制」）によって、加害責任を免責する構造があったことを指摘し、また、歴史否定論を支えるものとして、国家の体面や女性蔑視のまなざし（「有害な男性性」）がその背景にあることを明らかにしている。そのほか『モヤモヤⅠ』刊行後の動きとして、毎日新聞記者大貫智子の署名記事による『モヤモヤⅠ』への一方的で不誠実な批判記事の掲載と記事取消の顛末が触れられている。

第三章「モヤモヤからわたしたちが出会った朝鮮」では、歴史の現場に着目し、朝鮮学校、関東大震災、多摩川、大阪・生野、京都・ウトロ、沖縄などの日朝・日韓関係史の現場を訪れ、現在の問題が過去からの連続性の上に成り立っていることを示している。戦後の朝鮮学校史から、日本／朝鮮の非対称性を描き出し、朝鮮人としてのアイデンティティと教育権を否定し続けた日本社会を批判する。座談会では、韓国での踏査経験<sup>(3)</sup>や長期留学をしている学生間での話し合いから日朝・日韓関係史について議論をしている。

第四章「終わらないモヤモヤとその先」では、植民地支配の忘却や朝鮮へのヘイトスピーチ等、日本社会が抱える朝鮮への差別や蔑視をいかに克服するかに焦点を当てている。日本軍「慰安婦」問題の支援運動や韓国の運動の事例から、決して一部の特殊な人びとが社会運動を担っているのではないこと、自分ごととして運動に参加することが自分と他者の人権を守ることであるという明瞭なメッセージを発している。以上のように、『モヤモヤⅡ』は各章で日本社会への「モヤモヤ」がなぜ生まれるのか、その背景を多面的に検証し、読者に対して、その解決方法を提供している。

### 3-2. 『モヤモヤⅡ』の意義

『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』から二年ほどで刊行しているため、かなり急ピッチで作成したことがうかがえる。前回よりも論考の数は抑え気味で、『モヤモヤⅠ』刊行後のシンポジウムや座談会を多く掲載している(七本)。後述するように、『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』に比べると、各トピックがあまり深まっていないようにも感じられる。

それでは『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』に劣っているかという点、必ずしもそうではない。座談会を多く持つことで、『モヤモヤⅡ』は『モヤモヤⅠ』で示した思考を実践や対話というかたちで昇華しようとしたのではないか。コロナ禍で一般化したオンラインの座談会を積極的に活用することによって、メンバー間や他の学生間での思想の共有化や言語化に大きな役割を果たしている。『モヤモヤⅡ』に付された帯の「〈わたし〉から〈わたしたち〉へ」が示している通り、「モヤモヤ」を言語化し、それらを共有・共感することで、「モヤモヤ」する現状に対する対抗的な実践を可視化しているのが同書の特徴といえるだろう。

たとえば、「有害な男性性」という視点を示すことで、家父長制的な社会や政治のなかに埋め込まれている規範を抽出し、無意識にそれに取り込まれている〈わたしたち〉の責任を問う。また、自分たちの実践が「すごいテーマについて勉強しているね」(Ⅱ、112頁)と他人から言われることについても、それは自分たちの生活の一部であり、「楽しい」(Ⅱ、227頁)実践であること、『モヤモヤⅡ』は自分たちがおこなっている実践を言語化することで、仲間と出会い、共有する楽しさへとつながっていることを示そうとする。

加えて、「特権に対するモヤモヤ」(Ⅱ、93頁)といった表現や、「モヤモヤの種類が増えた」(Ⅱ、95頁)といったことが語られていることにも注目すべきだろう。第三章の朝鮮学校の事例では、訪問者である日本人教員側が、朝鮮学校の受けてきた差別や排除の歴史を十分に理解すること



なく、対等な交流として位置付けてしまっている点を批判する。『モヤモヤⅠ』でも繰り返し言及されたが、安易な文化交流はかえって危険なのである。とはいえ、著者たちは一刀両断に日本社会の批判をすれば事足りりとしているわけではない。自らの特権性を自覚し、何かを語ることによって、もう一方が周縁化されることについても自覚的である。第三章の座談会「ソウルで考える朝鮮、日本で学ぶ朝鮮」では、K-POP（文化）に関心があるから植民地支配（政治）を学ぶべきであるといった考えのあやうさや、前近代史を学ぶことが植民地支配の免罪になってはならないといった論点を著者たちは共有している。

ところで、メンバー間で議論がうまくやり取りできるのは、安心・安全なスペースでおこなわれたことの証左である。そうした観点から考えると毎日新聞の署名記事はメンバーの安心・安全を脅かし、嫌がらせやヘイトの土壌を生みかねないわけで、編者らが自由に思考や実践ができるのも監修者の加藤圭木のサポートがあつてのことであろう。

『モヤモヤⅡ』はこのような意義がある一方、見過ごすことができない論点もはらんでいる。次にそのことについて触れる。

#### 4. 論点

##### 4-1. 『モヤモヤⅡ』をめぐる論点

『モヤモヤⅡ』について感じるのは、入門書としての性格がやや後退していること、さらにいえば、読者を歴史的思考や歴史実践へと誘う仕掛けが減少しているのではないかということである。

たとえば、七つも配されている座談会は、他の論考ともあわせて、同じ話の繰り返し感が否めず、実践の書としての雰囲気醸し出しつつも、ポイントを不明瞭にしている感がある。本書が強調する「人権の視点」の重要性に関して、平井美津子が提起する、一部の生徒たちが国家の視点に回収されてしまうという問題は、本書が提起する日韓の右派が示す歴史認識等の問題とも絡むものであり、重要である（Ⅱ、104-105頁）。だが、本書における「人権の視点」の重要性についての提起は、座談会での発言などで断片化していて伝わりにくいのではないだろうか。本書の中心的な主張であるならば、国家を背負う歴史像に対置すべき「人権を中心に据えた歴史像」とはどのようなものなのか、図式的に整理するなり、イラストなどの視覚的な工夫も交えたうえで提示するような構成があつてもよかったのではないか。

また、「日韓」の政治やメディアの状況をめぐって、「有害な男性性」や「ホモソーシャル」といった学術的な概念がしばしば語られているが、それらについての説明がまったくないか、あつてもわずかな説明しかなく（Ⅱ、74-75頁）、体系的に読めるわけでもない。「男性性のあり方」を問い直すことの必要性が唱えられている（Ⅱ、77頁）が、それは決して一般向けにわかりやすい話とはいえない。さらに、初学者や韓国に行ったことのない読者に対する配慮が不足しているのは、座談会「ソウルで考える朝鮮、日本で学ぶ朝鮮」を読んでも感じることである。会話のなかで呂運

亭が突然登場するが、これは高校の世界史探究の教科書でも出てこない人物であり、朝鮮史を専門として勉強していない人間にとって常識的な知識とはいえない。『モヤモヤⅡ』の80頁で説明されているとはいえ、一度出しているからそれで事足りりとするのではなく、改めて括弧付きで「(→P.80)」と付けて案内するような工夫や配慮があってもよかっただろう。この点に関して、やはり「もやもや」を題に掲げた北原モコットウナシによる『アイヌもやもや』は、著者や周囲の人間の経験を軸にしつつ、考えるための重要概念の紹介と十分な説明へと導いてくれる建て付けになっており、入門書として出色である<sup>(4)</sup>。

問題は概念や知識だけではない。この座談会はソウルでの見聞を語り合う内容となっているが、土地勘のない人間は置いていけぼりにされてしまう印象を受ける。ソウル付近の簡単なマップを配置し、さらに各ロケーションの基本的な情報についてコラムを付けるなどの配慮が求められたのではないだろうか。最低でも、言及した博物館についての基本情報を注記するなどしてもよいように思われる。そうした配慮がなければ、読者がソウルを観光した際に、ついでに寄ってみようかという流れにならないのではないだろうか。この座談会では、「まったく普通の観光地。だけど、そこに日本帝国主義の歴史がある。自分たちは別にニッチなところへ行けという話をしているわけじゃなくて、多くの日本人が訪れる観光地が日本の侵略の歴史との関係があるということです。そうした認識が欠落しているということに、ぜひ気がついてほしいです。」(Ⅱ、182頁)という発言が見られる。評者もソウルを歩いたことがあるが、本書が上述のような配慮や仕掛けを欠いたままに、たとえば明洞を歩いて日本の侵略の歴史に気づいてほしいというのは、いささか無茶ぶりのように思えてならないのである<sup>(5)</sup>。

さらに『モヤモヤⅡ』の全体を通して感じるのは、自分たちに対する共感への志向が強く出すぎている場面が多々あるという点である。「言っていることはわかるけど」(Ⅱ、194頁)と著者たちに向けられた違和感を吐露する場面があるが、なぜ自分たちの活動が遠ざけられているのか、その点があまり深まっていらないように思われる。強い言葉でいえば、著者たちが『モヤモヤⅡ』で語っている共感や共有の射程は、内輪の会話というところに収斂しているのではないか。このことに関連して、『モヤモヤⅡ』は性急な社会の変化を求めすぎているきらいがある。社会運動を継続するのは率直に言えば「しんどい」実践であり、たまには休息や停止することも必要だろう。社会学者の富永京子が指摘するように、人にはそれぞれのライフステージがあり、社会問題に対して一貫した関与を続けるのは困難である<sup>(6)</sup>。「卒業したら、終わりですか?」(Ⅱ、208頁)とメンバー内で発せられていたのは、評者からすると、やや息苦しい雰囲気にも感じる。

加えて、『モヤモヤⅡ』は歴史否定論の広がりに対する著者たちの切迫感が溢れているあまり、論敵である歴史否定論や無関心層に対する一方的な言葉が見受けられる。歴史否定論は「有害な男性性」に支えられているとはいえ、一枚岩的に見える保守系の運動の論理についても、その切り取り方で違った景色が見えてくるのではないだろうか。社会学者の鈴木彩加は、女性の保守団体の語りや動向を検討した結果、同団体が、男性主義的な価値観を内面化する一方、韓国へのバツ

クラッシュや「慰安婦」問題への言及は、ヘイト一色でなく、女性としての性や身体をめぐる複雑な感情を有していると論じている<sup>(7)</sup>。

『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』の著者たちは単純化した韓国イメージや「過去」のこととして植民地主義を語ることに抗そうとしたはずである。にもかかわらず、歴史否定論や無関心層を単純化し、一枚岩的にみなしているようにも感じる。著者たちが粘り強く韓国での動向や複雑な歴史を読み解くのと同じように、歴史否定論や無関心層を一枚岩的に考えず、その内在的な論理を読み解くことも必要なのではないか。

誤解のないように付言しておく、評者は歴史否定論や無関心層にも一定の理屈があるから、そう考えるのも仕方ないと思えるわけではない。歴史否定論は史料に基づく論証をしておらず、むしろそうした論理を勘案することそのものが、在日朝鮮人への差別や過酷な植民地支配を相対化しかねないとする考えにも、説得力があるように思われる。ここで評者が問いたいのは、歴史認識における齟齬を対抗関係のみに帰着させてよいのだろうかという点にある。歴史教育者の小川幸司は歴史における対話という論点について、以下のように整理している。

いのちへのリスペクトをもって歴史を考え、ともに対話している「私たち」は、共同して他者に対抗する同盟者になるというよりも、他者に対して協働して「回路」を作ろうとする「私たち」になるように思います。「回路」というのは抽象的な表現になってしましますが、安易に連帯とも共感とも言えない、「相手のことをしっかり理解しよう、そのうえで自分自身を見つめ直そう」と思って他者に手を伸ばそうとするいとなみです。<sup>(8)</sup>

小川は自らが抱いて立つ歴史認識を共有することをゴールとして捉えるのではなく、「連帯とも共感とも言えない」他者との対話を通じて、相手への理解を深め、また自分自身の考え方への内省へとつながっていくと指摘している。『モヤモヤⅠ』の特筆すべき点は、日常生活の場から生じる「モヤモヤ」を手がかりに、疑問点を抽出しつつ、歴史学の研究成果を咀嚼しながら、他者である読者との対話の回路を切り開いたことにある。しかし、『モヤモヤⅠ』で示された成果は『モヤモヤⅡ』では後景に退き、「モヤモヤ」すること、その思考過程や葛藤、他者への回路といったことが見えにくくなってしまったのではないかと評者は感じざるを得ないのである。

『モヤモヤⅡ』においても、メンバー内での議論を通じて、「モヤモヤ」の種類が増えたという言及（Ⅱ、95頁）はあり、「モヤモヤ」は継続している。しかし、それはあくまでもメンバー内での認識にとどまり、『モヤモヤⅡ』のコンセプトであった「想像力と当事者性」によって、社会を変化させ、読者の認識を揺さぶろうとした挑戦は、あまり成功していないように思われる。ただ、著者たちがおこなった実践や思考は、自分ごととして、いかに植民地支配責任や戦争責任を引き受けていくのかという試みであり、その困難さを示したと捉えることができるのではないか。



#### 4-2. 歴史教育と「わたしたち」

ところで、『モヤモヤⅠ』刊行後、書評が2本まとめられている(2024年12月現在<sup>(9)</sup>)。ともに歴史教育の観点からの書評であり、歴史教育者の関心を大いに引いたとみてよいだろう。しかし、『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』がこれまでの歴史教育の土台の上に作成されたのかということにはやや疑問を抱かざるを得ない。

2022年度から高校歴史教育に導入された歴史総合は、それまでのいわゆる「暗記もの」とされていた歴史の科目とは異なり、「現代的な諸課題」を探るため(「問い」)、歴史的な史資料を読み解き、表現することで、主体的な歴史観・世界観を育成することを目的に新設された科目である。いわゆる、コンテンツベース(知識の獲得)からコンピテンシー・ベース(知識を使う能力)への転換が<sup>(10)</sup>目指されている。

対して『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』の本のつくりは、先行研究で明らかとなった史実を手がかりに、歴史否定論や植民地支配の忘却を批判するという構図になっている。したがって、歴史総合のような「問い」や史資料の読み解き、解釈といったプロセスは明示されていないように思われる。歴史総合という科目がつくられる前から、歴史教育は初等・中等教育の教員の手で担われ、教科内容の吟味、学校を取り巻く社会との関係、学ぶ主体である生徒といかに向き合うのかといったことについて、先に紹介した小川も含めて、さまざまな議論を提起してきた。<sup>(11)</sup>そうした観点で『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』を見ると、両書は若者たちの歴史認識の深化と捉えられるものの、歴史教育との関連は自覚的には考えられていないのではないかな。

むしろ問われるべきことは、生徒たちは何を歴史として受け止めたのかという点にある。一橋大学に進学する学生たちであるならば、受験という関門を突破するなかで、教科書に必ず掲載されている韓国併合への道筋や、植民地支配(武断政治、文化政治、皇民化政策)は最低限、「暗記」しなければならない。にもかかわらず、「高校で世界史をあんなに勉強していたはずなのに」(Ⅰ、12頁)といった発言が著者たちから発せられたのはなぜか。負の歴史を真剣に受け止めなかったのはなぜか。『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』が歴史教育の成果とは異なるかたちで出てきたことをいかに考えるか、今後深めるべき点の一つとなろう。

最後に、先述の「想像力と当事者性」との関連でいえば、そもそも編者らの語る「わたし」や「わたしたち」という主体は誰のことだろうか。マジョリティには名前がない。その点に意識を向けることなく、たとえば在日朝鮮人を三人称で第三者的に言及することは、執筆者と読者が形成する共同体のなかに「彼女らはここにはいない」という前提をつくってしまうことにならないだろうか。<sup>(12)</sup>そのことは、編者らが目指す社会の変化と乖離することにはならないだろうか。この点が重要なのは、高校の歴史総合において学びの主体となる「私たち」の問題と関わるが故である。学習指導要領解説によれば、社会の形成主体となる生徒が主体的に考察・構想できるようになることが謳われているが、それは教育基本法に沿うかたちで、「日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚<sup>(13)</sup>などを深める」

ことを目的の一つとしており、日本に住む「私たち」の内実やその文化の複数性を前提としていない。では、『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』の編者らの語る「わたしたち」は、歴史総合における「私たち」とどう異なるのだろうか。歴史教育の問題として、探究する主体としての一人称のあり方は、今後も考察されるべき論点である。

## 5. おわりに

『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』は大学生の歴史実践の優れた成果であり、多くの人びとの共感を持って迎えられた。本稿ではこれらの本を単に賞賛するだけでなく、その問題点も含めて論じてきた。学部学生を主体とする歴史実践それ自体は決して新しい試みというわけではない。近年では、パブリックヒストリーの議論に触発されながら、さまざまな歴史実践がなされており、歴史学をめぐる認識論や歴史をめぐる社会的な解釈や思考が焦点となっている<sup>(14)</sup>。そのような実践の系譜のなかで、改めて『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』の位置を考えるということも重要な論点となるだろう。

『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』からくみ取るべきは、第一に、わたしたちの日常や生活にひそむ事柄ひとつひとつが、歴史的に形成されており、とりわけ負の歴史は不可視化されやすいこと、第二に、歴史研究の成果と格闘するなかで、いかに言語化し、発信していくのかという、今日的な課題と向き合う姿勢だろう。「歴史する」という実践は一見すると増えてきたかもしれないが、マイノリティをめぐる歴史は等閑視される傾向にあるようにも感じる。その点で『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』の歴史実践はそれらに抗する道筋を示そうとしたわけである。

また、『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』は、完成形として存在しているのではなく、未完のプロセスと捉えることもできるだろう。歴史という時間軸のなかで物事を思考し、劣位に置かれた人びとを想像することで、物事の複雑さや権力のあり様を問うことができ、読者一人ひとりをそうしたプロセスへと誘い、もっと「歴史する」実践へと歩を進める力を秘めている。もっとも、『モヤモヤⅡ』は完成形としての提示がいささか強かったかもしれないが。とはいえ、こうした歴史実践に終わりではなく、歴史との向き合い方はどんな人にとっても継続していく課題である。『モヤモヤⅠ』・『モヤモヤⅡ』はそうした課題に向き合い、思考を促す導きの糸として、その困難さも含めて今後も参照されていくだろう。「モヤモヤ」はわたしたちにとって、開かれた「問い」なのだから。

## 注

- (1) 加藤圭木ゼミナールは2024年にもソウルの歩き方についてのガイドブックを刊行している。加藤圭木〔監修〕一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール〔編〕『大学生が推す 深掘りソウルガイド』（大月書店、2024年）。
- (2) 佐藤文香〔監修〕、一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』（明石書店、2019年）、貴堂嘉之〔監修〕、一橋大学社会学

部貴堂ゼミ生&院ゼミ生有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた——差別の「いま」を読み解くための入門書』(明石書店、2023年)。

- (3) 「踏査」について、加藤圭木ゼミのメンバーが執筆した別の入門書では、以下のように説明されている。「[実際に外に出て行って調べることを]朝鮮語ではタブサ(踏査)といいます。…〔中略〕…わたしたちが、このタブサという言葉を使うとき、「見学」や「調査」といった言葉とは少し違うニュアンスがあるように感じています。言葉にするのは難しいのですが、タブサそれ自体が韓国独自の文化の一つなのだと思います。」(前掲、『深掘りソウルガイド』、2頁)。日本の歴史学では、近年のパブリックヒストリーをはじめ、欧米の歴史学のトレンドを受容する傾向が強いが、この「踏査」の文化という点から、韓国と日本での歴史実践(「歴史する」)のあり方を比較検討することもできるのではないか。
- (4) 北原モコットゥナシ『アイヌもやもや——見えない化されている「わたしたち」と、そこにふれてはいけない気がしてしまう「わたしたち」の。』(303BOOKS、2023年)。
- (5) その点に関して、著者の一部も加わっている前述の『深掘りソウルガイド』は秀逸だが、両著はあくまでも別の書籍であり、本書において『深掘りソウルガイド』へと誘う注記があるわけでもない。また、歴史の地層を読み解く試みの好例として、KUNILABO 講義：松原宏之「ニューヨーク観光を歴史する！」(2024年4月15日、5月20日、6月17日、7月29日)を挙げておきたい。
- (6) 富永京子『みんなの「わがまま」入門』(左右社、2019年)254-256頁。
- (7) 鈴木彩加『女性たちの保守運動——右傾化する日本社会のジェンダー』(人文書院、2019年)。
- (8) 小川幸司『世界史とは何か——「歴史実践」のために』(岩波書店、2023年)27頁。
- (9) 渡辺風太『《書評》加藤圭木〔監修〕・一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール〔編〕『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』』『史海』(第69号、2023年3月)、高吉嬉『《書評》加藤圭木監修・一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』』『新しい歴史学のために』(第302号、2023年10月)。
- (10) 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説——地理歴史編』[https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt\\_kyoiku02-100002620\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf) (2024年12月1日閲覧)第2章第3節。なお、評者は知識と思考を二元的に解釈しているわけではない。
- (11) とはいえ、歴史家による歴史教育論は数多く発表され、再解釈される一方、戦後の教員側の歴史教育実践に関する研究は、授業実践例を除けば、それほど多くはない。さしあたり加藤正彦・八耳文之〔編〕『黒羽清隆歴史教育論集——子どもとともに歴史を学び、歴史をつくる』(竹林館、2010年)、加藤公明・和田悠〔編〕『新しい歴史教育のパラダイムを拓く——徹底分析！加藤公明「考える日本史」授業』(地歴社、2012年)を挙げたい。
- (12) この指摘は、前掲、北原『アイヌもやもや』第3章参照。
- (13) 前掲、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説——地理歴史編』127頁。
- (14) 大学生が主体となって刊行された人文科学系(歴史学系)の近年の成果として、専修大学文学部日本近現代史ゼミナール〔編〕『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』(専修大学出版局、2009年)、安岡健一〔監修〕大阪大学日本学専修「コロナと大学」プロジェクト〔編〕『コロナ禍の声を聞く——大学生とオーラルヒストリーの出会い』(大阪大学出版会、2023年)を挙げることができる。前者は近代日本の「軍事郵便」を手がかりに、史料読解・展示・聞き取りをおこない、ゼミ単位の活動の記録と考察となっており、後者はコロナ禍における学生・市井の人びとに対するオーラルヒストリーを試みた作品である。両書は歴史学の方法や視点を生かしながら、その時代に生きた人びとの生へと接近し、いまを生きる学生たちの思考や葛藤を含め記述している。今後も、大学生を主体とした刊行物や成果は増えていくと思われるが、大学における歴史研究、歴史教育との関わりや高大接続のあり方が改めて問われていくだろう。

